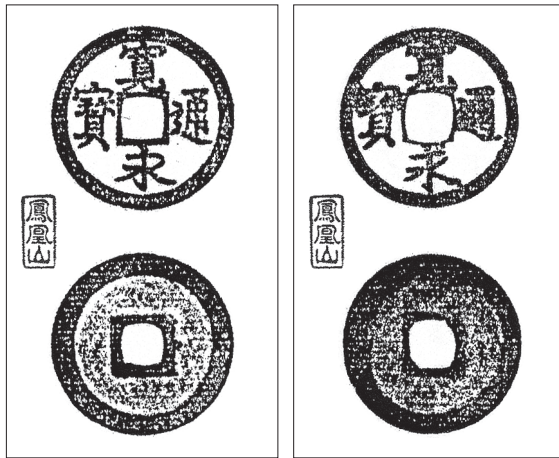


補遺一話

「思い違い」

鳳凰山 神野 良英



二水永マ頭通長字

二水永マ頭通

品種を押さえつつ、無背銭は「潤縁」を入手するまでは収集も順調に進みましたが、その上となる「短寶」や「長字」を入手するには少々時間が掛かりました。

さて、今回はこの「二水永」類から、ともに「マ頭通」の特徴を持つ二品をご紹介します。ただ、さすがに、このうちの「長字」については、私は「ある記述」から大いに遠回りをしてきた時代もあったのです。

少しばかり経緯をお話しさせていただきますと、私の最初に入手した『古寛永泉志』は改訂版であり、これは初版とは異なり、「マ頭通」と「長字」は別々の配置となっていました（初版では「長字」は「マ頭通長字」として、「マ頭通」の下に掲載）。

そして、この「長字」の解説欄に何の脈絡もなく記された「後出の説がある」という文言に思い違いをしてみました。

つまり、初心の私はこの「後出」を「後作の贋物の可能性もある」という意味に捉えてしまい、それゆえ入手を考えるとどこか、むしろ避けて来た感すらあったのですが、先輩方の藏品

を直に手に取らせていただくうちに、このもののどこに贋物の可能性（贋物と疑う要素）があるのか、当然のことながら疑問を持つようになりました。

その後、いろいろ調べていたところ、『昭和泉譜』（麗恵荘編）に「長字」が「二水永後出マ頭通」の名で掲載されていることを知り、全てを理解するに至ったのです。

すなわち、「長字」は常見の「マ頭通」に対し、その洗練された姿（製作）から、やや時代も降るであろうとして「後出マ頭通」の名を付されたにすぎず、「後作の贋物」などというありもしない先入観に惑わされていた自分が恥ずかしくなりました。

これについては、『古寛永泉志』が改訂版にて、「マ頭通長字」の名称から「マ頭通」の部分を外し、別のページに配置していたことや、その思わせぶりな記述が一番の要因でもあったわけですが、このときは泉書というものは、拓図や解説といったその表面だけを鵜呑みにするのではなく、行間や裏をも読まねばならないということを学んだ瞬間でもあったのです。

古銭の収集を始めたばかりのころ、古寛永通寶の「二水永」類は憧れの品であり、最初に「マ頭通」を入手したときは、それほど状態のよいものではなかったにもかかわらず、小躍りしたものです。

以来、「背三」類は「広三」を一枚、「背星」類は「大字」を一枚といったように、代表的な